未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 11月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長　日高　大司郎
令和４年１０月３１日発行

昔の子どもたち

夏休みに、「百鬼夜行展」という、水木しげるさんの原画展に行ってきました。水木さんは、言わずと知れた、あの「ゲゲゲの鬼太郎」の作者です。今年、生誕１００周年になるのだそうです。そこで見た原画は、本当に緻密なタッチで繊細に描かれていて、感動して帰ってきました。水木さんに改めて触れたくなって、以前に読んだことのある、水木さんのエッセイ「ねぼけ人生」と、もう１冊「のんのんばあとオレ」というエッセイを買ってきて読みました。

水木さんは、大正１１年に鳥取県境港に生まれました。子ども時代の話がたくさん書かれていて、興味深く読みました。昔は、よかったなんてこれっぽっちも言うつもりはないのですが、この僕よりもずいぶん上の世代の子どもたちの生活は、「子どもの育ち」を考える時に、参考になることがたくさんあるような気がしています。

メンコ遊びでは、自分がもっているメンコすべてとられるまで、真剣勝負をしたそうです。負けたメンコは、すべて相手のものになるルールに、厳しいなあと思いました。

ガキ大将が、往復２キロの遠泳を計画して、最年少３年生の水木さん含め１０人で泳いだ話もありました。外海の潮流があり、大きな船も航行していくところを、泳いだそうです。

様々なものを、自分で作った話もありました。凧やパチンコ（Ｙの字の形の木にゴムを張った、小石や木の実を飛ばすもの）なんかも、自分で作って調整して、うまく飛ぶようになったときのうれしさが書かれていました。

この頃の少年たちは、タフで、本当にたくましいのです。今だったら、いじめとして大問題になりそうなことについても、記述があります。それでもそこをかいくぐって生きていく（生きてきた）強さを感じ、この「たくましさ」を育てたいと感じざるを得ません。

それは、学校という場所にいて、子どもたちの「繊細」さを感じることが多々あるからです。「繊細」さは、おそらくその子固有の「気質」です。良い悪いではありません。しかし、「繊細」過ぎる子どもたちは、生きづらいはずだからです。

この「気質」は、生涯、大きく変化をすることはないと言われています。しかし、自分のそういった「気質」を理解して、それとうまく付き合っていけるよう「学ぶ」ことはできるのです。

本文中に、これがヒントだなと思う文章を見つけました。「子どものあいだのことに親をひっぱり出したり、おとなの力を借りたりすることはタブーであり、ヒキョウ者のすることとされていた。子どもの世界のことは、子どもの世界で解決するということなのだ。（小学生になるまでは、許されていたそうです。）」どうでしょう。どんなことをお感じになりますか。

現代の子どもたちは、集団の中で、「みそっかす」として年長者にくっついて遊びはじめたり、成長するにつれて、仲間同士で問題を解決をしたり、自分がその矢面にたって苦しんだり、自分の頭と手を使って、何かを作ったりといった、大人が介在しない中での、「子どもの世界」をもちません。子どもが、自分のことから逃げずに「学ぶ」機会がないのです。けれど、それが大事だからといって、水木さんの世代と同じようにしても、うまくいくはずがありません。（子どもが潰れてしまいます。）

しかし、親も教師も十分手を貸すけれど、**「子どもの世界のことは、子どもの世界で解決する」**ことは、努めてやらせることができると考えています。親は、たとえもやもやしても、悲しくても、苦しかったとしても、見守り、助言し、支えることに徹する必要があるのではないでしょうか。そして、「子どもの世界」でひと・もの・ことに向き合い、様々な経験をつむことが、「たくましさ」を育てることになるように思います。

「新鮮な子どもの時の、自然やみるものきくもののオドロキは、やはり子ども時代の時に味わっておかなければならない大事なことなのかもしれない。」　「子どもの世界」でひと・もの・ことに自分で向き合って育った、水木しげるさんのことばです。